

第 1202 回放送分『子宮頸がん』3 回目

ゲスト：小林裕明ドクター

二見いすず

今月のドクタートークは「子宮頸がん」をテーマにお送りしています。

お話は、3月まで鹿児島大学医学部産科婦人科にいらっしゃった

小林裕明（こばやし ひろあき）ドクターです。

小林さん、よろしくお願いいたします。

小林裕明Dr.

よろしくお願いいたします。

二見いすず

先週は、子宮頸がんワクチンについてお話しいただきました。

このワクチンは筋肉注射ですよ？

小林裕明Dr.

はい。筋肉注射は針を腕に垂直に深く差すので、皮下注射より痛いはずと

誤解されていると思いますが、そんなことはないんですよ。

HPV ワクチンの先進国ではすでに子宮頸がんが減少しているという結果が出ています。

二見いすず

そうなんですね。

日本では、なぜ子宮頸がんを予防する HPV ワクチンが遅れてしまったのでしょうか？

小林裕明Dr.

2010年から小学校6年生から高校1年生にワクチン接種の事業が始まりました。

2013年に定期接種が始まり、この世代の女子生徒が7割打ってくれたのですが、

この頃「ワクチンを打ったあとの痛みが全身に広がって、

けいれんしたり歩けなくなった」というニュースが

センセーショナルに取り上げられて、「ワクチン被害者」などという

原因を確定した言葉までマスコミで使われてしまったんです。

二見いすず

そのようなことがありましたね。

小林裕明Dr.

国として、定期接種は引き続き提供するが、積極的に勧めないという、

安全を検証する時期が9年も続きました。

不安を解消しづらい政府の対応でしたので、

この時期に日本の接種率は1%を切るまでに激減しました。

そんな日本を心配して WHO は 2019 年に
「天然痘のように子宮頸がんも世の中から撲滅する」ことを宣言しました。

二見いすず

WHO が宣言するほどだったんですね。

小林裕明Dr.

同じ時期に、このままだとアジア各国の中で、日本だけが突出して子宮頸がんが増えていくという予想論文も出ました。

二見いすず

ちなみに、ワクチンを打つと生活もままならない痛みが起きるといふ、その原因は分かったのですか？

小林裕明Dr.

機能性身体症状といつて、心の病ではないのですが、不安や心配事が契機となつて全身に症状が出てしまう、検査をしても異常が見つからない、あまり知られていない病気があります。HPV ワクチンを打つ思春期の女子に起きやすい病気ですので、接種後、日にちが経つて起きたものはワクチンと無関係の紛れ込みですが、接種後数日で起こつたものは、ワクチンが「怖い」と思つてしまつた不安が引き金となつて起きた機能性身体症状と考えられています。つまりは、ワクチンに対する不安を社会全体で解消してあげれば、この接種後数日で起きる機能性身体症状も無くなるということです。もし接種後にそのような症状が出て、対応する専門の医療機関が公開されており、ほとんどが治りますので、ご安心いただきたいです。

二見いすず

よく分かりました。今月は「子宮頸がん」をテーマにお送りしています。お話は小林裕明さんでした。小林さん、ありがとうございました。

小林裕明Dr.

ありがとうございました。